（第２号様式）
神奈川県教育委員会教育長　殿

令和８年３月 26 日

県立横浜旭陵高等学校長

令和７年度　学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	４年間の目標 （令和6年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （３月７日実施）	総合評価（３月 26 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	主体的・協働的な教育活動を通し、学習意欲を高め、課題解決力を育成するための教育課程の充実を図るとともに、生徒の自己肯定感を高める授業改善への取り組みを加速する。	①学習指導要領に基づき基礎的知識･技能の習得、思考力･判断力･表現力等の育成及び学びに向かう力等の育成に取り組むとともに、認知行動療法を活用した授業実践のみならず、その取組みを教科以外の教育活動や校外の活動にも拡大し、生徒の認知の多様化を図る。 ②一人ひとりの学習ニーズに応えるとともに社会で自立して活躍できるよう、生徒の自己肯定感の向上を図り、知･徳･体のバランスの取れた生きる力の育成に取り組む。	①認知行動療法を活用した多様な教育活動を実施する。 ①授業相互参観を年２回実施するとともに、認知行動療法の要素を取り入れた研究授業を通年で実施して、組織的な授業改善を進める。 ①「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を明確にした上で指導の充実と改善を図る。 ②１人１台端末を効果的に活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実に取り組むとともに、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた組織的な授業改善を進める。 ②認知行動療法を活用した教育活動の指導内容と指導方法について、組織的に研究を進める。	①認知行動療法を活用した取組みを複数回実施し、その取組みを質問紙調査等で効果測定して成果が見られたか。 ①授業見学や研究授業の振り返りを実施し、自己肯定感を高めること、学習意欲を向上させること、主体的に学び考える力を育成することができたか。 ①令和４年度以降の入学生の教育課程を適切に実施できたか、生徒に基礎的知識･技能、思考力･判断力･表現力、学びに向かう力等を身に付けられるような指導方法の改善ができたか。 ②生徒による授業評価の主体的な学びや対話的な学び の項目で、成果が見られたか。 ②生徒自身が相互に学び合うことのできる場面を設定することができたか。	①認知行動療法を活用した取組みに関する質問紙調査等の結果から、生徒の学校適応が促進されたなどの成果が見られた。 ①23 期生の行事として校外学習（２月）を実施し、多様な体験活動を通して、生徒の認知を豊かにすることができた。 ①年２回の授業見学月間を実施した。教科を問わず互いに授業見学をした後、学力向上や生徒の自信につながる授業、ICT を活用した主体的な学びについて意見交換を行い、授業改善や生徒把握に役立てた。 ①年次進行型単位制の学びをより充実できる教育課程を実施することができた。 ②生徒による授業評価の結果では、「他者の考えを知ることで、自らの考えが広がったり深まったりした」「授業の中で『身に付いた』『できるようになった』と感じることができた」という項目で肯定的な回答が多く、主体的な学びや対話的な学びの項目で、成果が見られた。 ②生徒の自己肯定感を育む取組みとして、教職員対象の研修会（５，７，11 月）や、生徒対象のワークショップ（４，５，６月）を実施した。	①生徒の認知を多様にし、自己肯定感を高めるための教育活動を継続して推進するとともに、教職員対象の研修会等を通じて指導方法について情報共有を行い、実践の質を向上させる。 ①授業見学月間については、さらなる活性化を目指し、同一教科だけではなく、他教科の実践例からも学び合う機会を増やし、教科横断的な取組みの推進を図る。 ①引き続き、完校に向けた業務と合わせて、生徒一人ひとりが進路実現できるような年次進行型単位制の学びの充実に取組み、事故無く成績処理を行えるように準備を行っていきたい。 ②授業の冒頭で、学習の見通しを持たせる工夫をしたり、根拠を大切にした話し合いを促進する学習活動を意識的に取り入れたりすることで、さらなる理解の深化を図る。 ②引き続き、認知行動療法を活用した教育活動の指導内容と指導方法について、組織的に研究を進める。	②生徒による授業評価が高く、授業改善の取組が着実に成果を上げている。生徒にとって学習への意欲ややりがいにつながっている点が評価できる。 ②サポートティーチャーの取組は、生徒一人ひとりに応じた支援に大きな効果を上げている。他の教員とも連携し、より広く活用していくことが望ましい。	①認知行動療法を取り入れた授業実践により、生徒の肯定的な認知変容や学校適応の促進に確かな成果が見られた。 ②ICT の活用等を通じ、生徒の「主体的な学び」「対話的な学び」に関する評価項目で肯定的な回答が多く得られ、組織的な授業改善が進んだ。 ②さらなる質の向上に向けた教科横断的な取組みの推進や、個に応じた学習支援の継続が必要である。	①認知行動療法を活用した教育活動を、教科以外や校外活動へも拡大し、教職員研修を通じて指導の質をさらに向上させる。 ②授業見学の活性化により他教科の実践から学び合う機会を増やし、学習の見通しを持たせる工夫や根拠を大切にした話し合いを促進する学習活動を強化する。 ②CO-Study LAB.で行う学習支援や外国につながりのある生徒の学習支援について可能な範囲で引き続き推進を図る。
2	（幼児・児童･） 生徒指導・支援	学校のルールを徹底することで社会規範の学びにつなげるとともに、自分を大切にし、他者と協調できる心豊かな人間性を培うことをめざした、一人ひとりを大切にするきめ細やかな支援教育を推進する。	①生徒の自己有用感の向上を図るため、丁寧な生徒指導及び教育相談を実践することで、社会の中で自分らしく生きることができるよう成長や発達を支えるとともに、地域との連携を探りながら、規範意識を高めるため、情報モラルの向上をはじめ社会生活で重要なルールやマナーを身に付けさせる。 ②学校生活の充実を図るため、生徒会･委員会活動や部活動を活性化させる。	①スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー及び外部機関との連携をより強化するとともに、チーム支援や職員研修の充実を通して生徒の自己有用感を向上させる。 ①教科･科目、特別活動等様々な場面を通して規範意識を高める。 ②生徒が諸活動に意欲的に取り組むことのできるように支援する。	①外部機関との連携を図るとともに、チーム支援や職員研修の一層の充実を図ることができたか。 ①様々な教育活動において規範意識の向上を効果的に進めることができたか。 ②生徒が諸活動に意欲的に取り組むことのできるように支援することができたか。	①児童相談所等との連携を図るなど、教育相談体制の確立に努め、連絡を取り合いながら対応できた。スクールソーシャルワーカーの更なる活用により、相談体制を手厚くすることができた。 ①教科・科目、特別活動等様々な取組みを通して行うことができた。 ②部活動は少数ながらも、地道に活動している。11 月の生徒会役員選挙には６人の立候補者があり、全員信任された。生徒会役員選挙は選挙管理委員会が中心となり、滞りなく実施できた。	①今後も連絡をより密に取り、教育相談を充実させる。情報交換会議を効果的に活用して課題のある生徒の支援を継続的に行い、必要であれば外部機関へと繋げる。 ①教科・科目以外の取組みにおいて、効果的な方法やより具体的な内容を検討する。 ②職員減を踏まえた顧問配置が課題である。生徒会については役員減の中活動の継続性が課題である。	①ソーシャルスキルトレーニングの導入により、生徒が「できなかったことをできるようになる」経験を積んでいることは大変意義深い。社会生活に必要な力の育成にもつながるため、指導方法や成果を共有できる場を設けると、より効果的な取組となる。	①スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等との連携強化により、手厚い教育相談体制が構築された。ソーシャルスキルトレーニングの導入により生徒の社会生活に必要な力の育成に非常に意義深い効果を上げた。 ②教職員減に伴う部活動の顧問配置や、生徒数減少の中での生徒会活動の内容についてフレキシブルな対応が必要である。	①引き続き関係者と密に連携し、情報交換会議等を効果的に活用して支援が必要な生徒への早期対応を継続する。ソーシャルスキルトレーニングの指導方法や成果を校内で共有する。 ②生徒会活動については役員減に応じた柔軟な活動形態を支援する。

	視点	４年間の目標 (令和6年度策定)	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （３月７日実施）	総合評価（３月 26 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
3	進路指導・支援	生徒一人ひとりの進路実現を目指し、外部とも連携し、学びの場を増やすことで、必要な基盤となる能力や態度を育成する。	①卒業時までを見通したキャリア教育実践プログラムの充実を図るため、グループ間の連携を一層推進するとともに、「人と社会と未来につながる力」を育成するため、キャリアの時間のさらなる充実を図り、生徒の進路への意識を高める。 ②生徒一人ひとりの進路希望の実現に向けて組織的な進路指導体制を一層向上させる。	①キャリア教育実践プログラムの充実に向け、校内体制を整備するとともに外部機関との連携を強化する。 ②キャリアの時間の充実に向け、グループ及び年次間での情報共有等、連携・協力体制を推進する。 ②生徒の希望進路の実現に向け、組織的なキャリアカウンセリング、ガイダンス、補習、模擬試験、面接指導等、一人ひとりに応じた指導を実施する。	①キャリア教育実践プログラムの充実に向け、校内体制の整備や外部機関との連携を強化することができたか。 ②キャリアの時間の指導を通して、生徒が具体的な進路希望を持ち、進路探究に対する意識を高めることができたか。卒業年次の 80%以上が具体的な進路希望を持ったか。 ②個々の生徒の希望進路に応じた組織的なキャリアカウンセリング、ガイダンス、補習、模擬試験、面接指導等を十分に行うことができたか。	①キャリア教育に関して年次間での引き継ぎや情報共有を積極的に行った。夏季休業中に、一日看護体験（延べ 24 人）、インターンシップ（延べ２人）、「仕事の学び場」（延べ２人）に参加し、今後の進路選択について考えることができた。 ②生徒の進路希望に応じた進学・就職模擬面接やガイダンスを行い、きめ細やかな支援を行い、結果として 89%の生徒が進路決定となった。卒業年次は新たに校内模試を年４回実施し（4・6・10・11 月）、延べ人数 32 名が受験した。受験結果を担任と共有し、面談を行い志望校の決定に活用した。 ②キャリアカウンセリングは2年次のみ実施し、延べ人数 332（昨年度 967）名が積極的に活用し、個に応じた効果的なカウンセリングが実施できた。	①「キャリアの時間」の今年度の検証を含め、「探究型学習」を踏まえた学習内容や手法について継続して検討する。 ②進路の確定を目指して、本人と家庭、担任の情報交換をさらに密に行う。特に進学に必要な資金の確認を６月３者面談で確認し、生徒の前で伝えづらいことについては、担任やＳＳＷとの保護者面談を行う。また、進学から就職へ変更となった生徒への指導はハローワークと連携し、２次募集を実施している企業への見学を早急に行う。	①生徒一人ひとりに丁寧に向き合う姿勢が見られ、社会で生きていくための力を育む指導が行われている。学習の先を見据えた教育が実践されている。 ②地域の施設や事業所を活用し、進路の具体的なイメージをつかむ機会をさらに充実させていくことが期待される。	①きめ細やかなキャリアカウンセリング（延べ332名）や模擬面接、校内模試の実施により、進路決定率 89%という高い成果を得ることができた。 ②インターンシップや外部プログラムへの参加を通じ、生徒が自身の将来を具体的に考える機会を確保できた。	①「キャリアの時間」の内容を検証し、「探究型学習」を踏まえた学習内容や手法について継続して検討する。 ②三者面談等を通じて家庭との情報共有を一層密にする。進学費用の確認など家庭とのより早い段階での連携や、進路変更者への迅速な対応を継続する。ハローワーク等の外部機関と連携した就職支援体制を継続・強化する。
4	地域等との協働	地域や保護者等との連携・協働を促進し、学校の教育力向上を図る。	①「社会に開かれた教育課程」を実現するため、地域及び様々な研究機関や専門家等との連携をより一層強化する。 ②生徒会、委員会、部活動等における学校外での活動や、生徒のボランティア活動への参加を促進し、地域との連携を通して社会貢献に対する意識を向上させる。	①学校運営協議会の一層の充実を通して「社会に開かれた教育課程」を実現する。 ②生徒会執行部、委員会、部活動へ積極的に情報提供する。 ②ボランティアガイダンス等を通じて、生徒の地域理解を深める。	①研究機関や専門家との連携が生徒の成長に効果的に機能したか。 ②生徒会執行部、委員会、部活動が地域のイベント等を通じた交流が促進できたか。 ②ボランティア活動や学校外の諸活動に生徒が参加することで、生徒の地域理解が深まったか。	①生徒会役員が大学の先生に教えを請いながら、生徒向けの「アサーション」の授業を計画し、９月に卒業年次生への授業を実施した。 ②校内の清掃ボランティア「Gommy」による有志の地域清掃を実施した。 ②生徒会役員が、ズーラシア駅伝に役員として参加し、運営に協力した。	①来年度の実施についても検討するが、生徒会役員減少の中で、どこまでできるかが課題である。 ②生徒減の中、活動は縮小せざるをえないが、継続できるよう生徒会役員を支援する。 ②生徒減、職員減の中ではあるが行事継続の検討をする。	①校外学習を通して地域との交流が図られている。来年度も小学生との交流など、地域の人々と関わる活動を継続し、ボランティア精神や社会性を育む機会を確保してほしい。	①大学と連携した「アサーション」の授業や地域清掃、地域のイベントへの協力など、「社会に開かれた教育課程」の実践が進んでいる。 ②生徒や教職員の減少という制約がある中でも、地域との交流が維持されている。	①これまでの活動、その効果を活かすよう、実施内容を吟味し、実行する。 ②ボランティアガイダンス等を通じて生徒の地域理解を深める機会を継続的に確保できるよう、生徒会等を支援する。
5	学校管理 学校運営	教育環境の変化に柔軟に対応するとともに、事故不祥事防止を徹底し、生徒・保護者や地域から信頼される学校づくりを推進 する。	①生徒の命と健康を守るため、学校防災体制を整備するとともに感染症拡大防止対策を推進する。 ②安全安心な環境で生徒の学びを進めるため、不祥事及び事故の未然防止に向けた教職員の見識を向上させる。 ③生徒・保護者や地域から信頼される学校づくりを進めるため、働き方改革の取組を加速化し、教職員が力を十分発揮できる職場の環境整備と健康の保持増進を図る。	①自他の生命を尊重できるための教育及び自然災害等に適切に対処できるための防災教育を推進する。 ②定期的に研修会を実施するなど、不祥事防止会議の充実を図る。 ③外部人材の効果的な活用による教職員の業務負担軽減や、課題を抱える生徒への支援を行い、チームで支える学校づくりを推進する。	①生命を尊重することや防災に対する生徒の意識が向上したか。 ②不祥事及び事故を未然に防ぐことができたか。 ③外部人材の効果的な活用による教職員の業務負担軽減や、課題を抱える生徒への支援を行い、チームで支える学校づくりを推進することができたか。	①3・11 を風化させない取組み（３月）や防災訓練（９月）を行い、災害時に必要な情報やいのちの大切さを伝えることができた。 ②定期的な不祥事防止会議や研修を通じ、教職員の見識向上に努めた。重大な不祥事や事故の発生はなく、安全安心な環境を維持することで生徒の学びを継続的に保障できた。 ③業務アシスタントや SC 等との連携で負担を軽減。かながわ子どもサポートドック等を活用し組織的な支援体制を構築したことで、チームで課題に当たる意識が全校に浸透する成果を得た。	①いのちを守る教育と防災教育がより実効的なものになるよう、今後も継続していく。 ②意識の形骸化防止が課題。今後は具体的な事例研究を深め、SNS 利用や体罰防止等、多角的な視点から研修を充実させることで、不祥事ゼロの体制をより強固なものにする。 ③今後は「すぐーる」等の DX 活用により情報共有を効率化し、全教職員の健康保持と業務の平準化に向けた取組みを一層加速させる。	①生徒数・教職員数が減少する中でも、学校生活を充実させようとする前向きな姿勢が見られ、様々な活動が継続されている。 ②完校を控える中でも、生徒・教職員が協力し、多様な活動に取り組んでいて、学校全体の雰囲気の良さが保たれている。来年度も制約のある中で工夫しながら活動を継続してほしい。	①②防災訓練や不祥事防止研修の定期的な実施により、安全・安心な教育環境を維持し、重大な事故・不祥事ゼロを継続した。 ③業務アシスタントの活用や「すぐーる」等の導入により、教職員の業務負担軽減と情報共有の効率化が進んだ。	①②意識の形骸化を防ぐため、事例研究を深める研修等を実施し、体制をより強固にする。 ③ICT 利活用をさらに加速させ、全教職員の健康保持と業務の平準化を一層推進する。